

川内村の復興子ども教室

子どもたちが自ら未来を描けるように



秋元 正 教育長
川内村 教育委員会

原発事故後、川内村では子供の減少を受けて、教育のあり方を再検討しました。大切にしたのは、震災や原発事故も含め、ありのままを理解していく「ふるさと教育」。そんな中から、「復興子ども教室」が始まったのです。

川内村では、早期に帰村宣言を出して、2018年12月の時点で、震災前の人口の8割の水準まで村民は戻っています。しかし、子どもに限ると、戻ったのは1000人程度にとどまり、割合で言えば、5割です。

また、川内村では、全国からシングルマザーの移住を受け入れる施策を進めたこともあり、子どもの人口の3分の1は新たに村に移住してきた子どもたちです。

もともとあった社会が変化し、子どものつながりも以前とは異なる中、川内村では教育のあり方を再検討しました。大切にしたのは、震災や原発事故の発生で受けた村への影響も含め、村のことにありのままに理解してもらい、自らのアイデンティティや誇りを子どもに持てるようにしていく「ふるさと教育」でした。

復興子ども教室は、2013年から2018年まで毎年開催されており、既に6回を数えています。小学校の総合学習の時間を活用して行うもので、毎年2回、長崎大学から教育学部と医学部保健学科を中心とした学生が、川内村を訪れ授業を行っています。さらに夏休みに、川内村の子どもが長崎市を訪問して、研修や実験などに取り組んでいます。

子どもたちにとって、長崎の復興は大きな学びとなったようでした。例えば長崎では、町内会長が発起人となり作られた「大長崎建設会社」が中心となって長崎の町が再び作られたことが紹介されました。秋元教育長は、「誰かがやってくれたのではなく、市民が立ち上がって復興したことを知りました。子どもたちは、自分たちが当事者なのだという意識が芽生えたのが一番の成果でした」と話します。

次の世代にバトンタッチする教育とは

川内村教育委員会の秋元正教育長は、「村の復興に全身全霊を注ぐという気持ちは常にありますが、30年、40年先のことを考えたとき、次の世代にバトンタッチしないといけないのは明らかです。村が復興していく姿を突き

詰めて考えたとき、「村や地域や自分の家庭に対するアイデンティティや誇りを育てていかないと」との考えに至りました。これまでは遊びや行事のなかでふるさと教育が自然となされていきましたが、「地域が大きく変化した今は、ふるさと教育を学びに取り入れる必要がある」と考えました。それには川内小学校の埴広治校長も同意してく

当事者意識を芽生えさせる

秋元教育長は、「長崎は、70年前に原子爆弾による壊滅状態から復興を成し遂げたのです。それを学んでほしいと思います。長崎大学の先生や学生さんからは、いろいろな学びを実現してもらっています。また、大学生と一緒に学ぶことで、その姿に小学生が近未来をイメージできるのです」と言います。

からの復興の取り組みも取り入れられるようになりました。火砕流が起きた後の自然災害からの復興について学習するためです。

「未来に向けた復興を考えたときに、子どもたちが、自然や科学技術を前向きにとらえられていなければ、未来志向の科学は生まれません」と、星野教授は語ります。子どもたちに未来を作る意識を持ってほしいとの思いが、復興子ども教室のプログラムを進化させています。



川内村で電池作製に使用するブルーベリーを摘む川内村小学校の児童

未来を作る意識を持つもらう

2017年からは、理科教育も組み込まれています。提案者である長崎大学教育学研究科の星野由雅教授は、「自然と先端科学とを融合した教育プログラムを提供したいと提案しました。震災から6年、7年と経過しても、福島の子供たちにとって、自然は恐怖であ

り、科学技術の信頼性には疑問符がついた状況にあると考えていたためです」と話します。そうして、川内村で栽培されたブルーベリーを使って、電池を作るという実習を復興子ども教室で取り入れることになりました。植物の色素には光が当たると電流の素となる電子を出す性質を持つものがあり、それを生かした実験です。また、雲仙普賢岳の噴火

子どもたちが作った「かえるマラソン」



長崎大学での復興子ども教室を経て意識が変わった子どもたちに、自分たちの手で何かを作るという成功体験を持ってもらおうと生まれたのが「かえるマラソン」でした。川内村の復興のために何をしたらいいかというアイデアを子どもたちに出してもらい、そこから企画を村で実現したものです。2016年に第1回目を開催し、目標は1000人参加でしたが1200人を集めました。第3回となった2018年は1800人が集まるまでになり、ランナーの投票で選ばれる「全国ランニング大会100撰」にも選ばれました。子どもたちが企画に深く関わり、環境の整備、ゴミ拾い、特産を生かしたPRとして、そばの提供などを考案しました。かえるマラソンの名前は、震災前から村のシンボルだったモリアオガエルと村への帰還、「フロッグ」と「リターン」を掛けたものとなっています。



復興子ども教室で理科教育を担当している星野由雅教授